

尾熊治郎教授のご退職に寄せて

仰ぎ見る人間教育の体現者

有里 典三

また一人創大通教部から名物教授が退職された。その温顔がなんともいえず魅力的であった。日に日に寂しさが募る思いがする。尾熊先生とは、通信教育部の専任教員として、4半世紀の時間をごいっしょさせていただいた。私にとっても決して短くはない人生の貴重な時期に、尾熊先生からは公私にわたりさまざまなご教示とご鞭撻をいただいた。今、心からの感謝の意を表させていただきたい。先生の御退職に際し、われわれ後進が何を継承しなければならないかをじっくりと考える意味で、私の心に残っている思い出の一端をここで振り返ってみたい。

1989年（平成元年）の3月29日。新任の助手として採用が内定していた私は、先輩の専任教員の方々とお会いするために、旧通信教育部棟の2階にあった共同研究室をはじめ訪問した。そこで、当時まだ専任講師であった尾熊先生とはじめてお会いした。先生は40代の半ば頃であったと思う。先生の第1印象は、温厚で人情味のある教育者というものだった。その後、交流が深まるにつれ、後輩思いの誠実な方という印象が強まった。また、哲学がご専門であることから、要領を追わず、常に物事の本質を問題にされる方だということがわかってきた。特に感銘を受けたのは、言葉の端々に通信教育部に対する熱き情熱が脈打っていたことである。

尾熊先生は、平日にはいつも夜の8時過ぎから11時頃まで、ご自分の研究室で熱心に講義の準備をされていた。私が助手から専任講師の頃のことだが、当時私の研究机や書棚は共同研究室の奥まった窓側の一角に設置されていた。通教の共研は、人の出入りが激しく専任教員のサロンのような場所になっていた。それで、授業が終わる午後6時ぐらいまでは集中して仕事ができなかった。（もっとも、そうした家族的な雰囲気が通教部の強みでもあったのだが）。そこで私は、研究は午後6時以降から深夜までと割り切って共研の奥で研究や日々の業務を行っていた。まだ30代の前半から中盤の頃である。体力にも自信があったので、週に1～2度は共研に泊まり込んで朝方まで研究に没頭した。尾熊先生は私のそんな姿を見て、「有里先生は瞬発力があるね。今は忍耐強く時を待つことだよ」とぼつりと言われたことが心に残った。

そんな研究生活が助教授時代に二人部屋になってからも数年続いた。本部棟に移動する1999年の夏までと記憶している。その間、尾熊先生とは夜に共研でごいっしょする機会が増え、頻繁に対話を重ねた。今振り返ると、私にとってはたいへん

に貴重な時間だった。共研での夜の対話を通して、先生は創立者との金の思い出、大学の草創期のエピソード、通教開設の経緯、創立者の通信教育部に懸ける思い、創大生・通教生に対する渾身の激励、人間教育を担う教員の姿勢や研究の要諦など、創大に奉職する教育者として研究者として、心に刻み付けておかねばならないことを数多く教えてくださった。未熟で短気な性格の私にとっては、心に染み入るような指導・激励の一時であった。

教育者としての尾熊先生の最も優れた点は、創価大学から、通信教育部から新たな人材を輩出しようといつも真剣に考えられていたことである。私にはこの点が特に印象的だった。先生の教育姿勢の特徴は、創立者の精神を基盤にして、常にそこから学生の育成、通信教育部の存在意義と発展を発想されていた点にある。私は、「これは並みの教員ではないぞ。創価大学が標榜する『人間教育』とは、こうした本物の教員の、透徹した覚悟をもってしか達成できないにちがいない。まさしく教師こそ最大の教育環境なりだな」と少しずつ「人間教育」への理解を深めていった。先生は開設30周年を記念する座談会のなかで次のように発言されている。真の「人間教育の体現者」としての面目躍如たるものがある。

「強調したい点は、30年前に創立者が示された『人間としての完成』を目指すという創大通教の原点が、現代の教育のあり方そのものを問い直し、その転換を図っていくことになっているんだ、ということですね。……一人ひとりが、『人間としての完成』を目指す生き方を徹底することによって[教育目的の逆転現象を]転換していく、そういう大きな歴史的役割を創大通教は担ってきたと思うんです。」(『学は光—創立者の指導集—』p.167参照。)

次に、尾熊先生の研究者としての一面に触れておきたい。先生の大学院時代の研究テーマは、人間の有限性と時間性を突き詰める中で、「人間の生き方・あり方」の本質的なものをとらえ直そうとした「ハイデガーの存在論」である。指導教官は中央大学の斎藤信治教授である。その後、ハイデガーにアプローチする一つの方法としてニーチェに着目されるようになった。先生の研究方法とテーマに影響を与えたのは、西田幾多郎門下の西谷啓治教授である。西谷教授はニーチェのニヒリズム論(ハイデガー・ニーチェ研究)の大家で、創価大学が開学した1971年当時、代々木にあった東洋哲学研究所において3年ほど「哲学演習」を担当されていた。その直系の弟子である刈田喜一郎創大教授からの勧めもあり、西谷教授の演習に参加するようになったと語られていた。

ニーチェは、「生のあり方」すなわち「生と価値の関係」を徹底的にさぐった哲学者として名高い。有名な「ニヒリズムの三段階」を想定し、受動的ニヒリズムから積極的ニヒリズムへ、そして現実を受け入れ、これでいいと肯定しうる生のあり方へと脱皮する道筋を探究した。いわば、ニヒリズムの徹底による自己克服の追及である。そして、ニーチェは西洋思想の伝統を自己批判的に越え出ようとした。そうすることで、西洋思想と東洋の大乗仏教が根本的に出会う場を開いた。私が先生

ご自身の生涯の研究テーマについてお尋ねしたところ、「西谷先生のハイデガー・ニーチェ研究に学びながら、東洋思想の現代的意味や射程を明確にすることです」と一言一言確認するようにお答えになっていた。

社会学を専門にしている私には、先生の深遠な研究テーマを正確に理解する能力はない。しかしながら、私は研究者としての尾熊先生からも多くのことを学んだ。その一つが「問い」のもつ重要性である。先生と対話をするたびに、私の研究テーマについて度々質問され、何度も本質的な問いかけをしていただいた。よく「問いの意味を問え」といわれていたことを思い出す。問いの意味を考え、物事の本質を抉り出すような問いを立てることの大切さを強調されていた。若い頃の私は、重厚な学問の雰囲気、優れた教養主義の雰囲気が横溢する先生の研究室で、そうした哲学的な刺激を受けるたびに途惑うばかりであったが、内心ではとても楽しい満ち足りた気分を味わっていた。なぜなら、非暴力運動の指導者マハトマ・ガンジーが指摘したように、真理の探究と把握には大きな歓喜がともなうからである。

もう一つ研究者として大きな影響を受けたのは、先生が異なった考えの持ち主であってもこだわりもなく容易に対話をされる姿だった。対話をしているうちに、いつの間にか相手を巻き込んでしまわれるのだ。個性がぶつかり合い人間関係がギクシャクした場面でも、尾熊先生がそこにおられると不思議と雰囲気が和むことが多かった。まさしく日常生活における潤滑油の存在であり、人と人をつなぐ連結器のような才能をもっておられた。今思えば、「対話の達人」だったことがわかる。創立者はことあるごとに「対話の重要性」や「対話のあり方を問うことの重要性」について言及されている。決してことばの呪縛にかかってはならない。独断と偏見で対象を固定的に見てはならないと。しかし、こうしたエゴに対する執着を超えた柔軟な態度を維持することは実際には難しい。考え方や性格の異なる相手に寛容でいられるほど人間は忍耐強くない。先生は「対話のあり方」について、哲学的にも実践的にも、何か信念と教訓をおもちであったと想像している。

尾熊先生は、ご退職後の今も、「NPO 法人 滝山城跡群・自然と歴史を守る会」（在籍者数65名）の副理事長として活躍されている。今年の8月で結成満10周年の佳節を迎えられたそうだ。前身は「郷土を知る会」という地域住民の親睦団体であったが、先生ご自身が発起人となり著名な城郭研究家の協力を得て、うずもれている地域文化を蘇らせようと長い間尽力されてきた。着実に組織も発展し、今では隣接するあきる野市や昭島市にも会員の輪が広がっている。このように、人をまとめる行動力も、実は先生の隠れた才能の一つである。忍耐強く裏方に徹しながら誠実に事を処理していく能力である。先生の行動力に溢れた姿はいつ見ても若々しい。先生、これからはますますお元気でご活躍ください。私も創大通教部の専任教員の一人として、先生に負けないようにこれからも精進いたします。そして、創立者の精神を我が心とする真の「人間教育者」に成長したいと決意しています。今後とも、通信教育部に対する変わらぬご支援をお願い申し上げます。尾熊先生、長い間、本当にありがとうございました。以上